

令和二年度 博士（文学）学位請求論文

内容及び審査の要旨

古代日本の祭祀伝承とその基盤

川畑 勝久

皇學館大学大学院

川畑勝久氏学位請求論文 古代日本の祭祀伝承とその基盤 審査及び最終試験報告

本論文「古代日本の祭祀伝承とその基盤」は、令和元年十二月十二日に川畑勝久氏より提出された博士（文学）の学位請求論文である。

川畑勝久氏は平成三年三月に皇學館大学文学部国史学科を卒業、平成五年三月に皇學館大学文学研究科国史学専攻博士前期課程を修了、現在は権禰宜として住吉大社に奉職されている。

川畑氏が提出した論文は、令和二年三月三日の大学院委員会において予備審査を通過したことが報告された。これを受けて本審査に移ることが決定され、荊木美行・加茂正典・遠藤慶太の三名が審査委員に選ばれた。委員会終了後に協議して遠藤が主査を務めることになり、三名は論文読了のうえ令和二年五月二十日に集まって意見を交換、令和二年六月七日に博士論文口頭試問の公開審査を実施した。以下、その審査結果を報告する。

論文全体の構成は次のとおりである。

目次

まえがき

第一部 神郡論

第一章 神郡研究史序説

第二章 八神郡の降臨神話―七世紀の神祇政策の起点

はじめに／一、問題提起 青木紀元氏による大和系神話の降臨伝承の分類／二、記紀神話にみられる八神郡のカミ／三、在地の風土記伝承にみえる八神郡のカミ／四、氏族伝承にみえる八神郡のカミ／五、まとめ 降臨神話の共有と神郡成立の時代的背景

第三章 八神郡の祭祀と神戸

はじめに／一、香島神郡の成立と神戸／二、香取神郡の祭祀と神戸／三、意宇神郡の祭祀と神戸／四、紀伊国造と名草郡領の兼帯と神戸／五、宗像神郡の成立の背景と神戸／六、安房神郡の祭祀と神戸／おわりに

第二部 神戸論

第一章 神戸研究史序説

第二章 神戸の規定とその運用

はじめに／一、神祇令神戸条にみえる神戸の田租とその運用／二、延喜式にみえる神税の運用／三、神社修造費と神戸の運用の歴史的変遷／四、慣習法としての神戸の俸禄費と祝部の役割／五、神戸の定数―丁数と租数／おわりに

第三章 律令制神戸の成立と改新の詔

はじめに／一、律令制神戸の成立／二、食封制と神戸／三、神部と神戸／おわりに

第四章 畿内の神戸神社と令制祭祀―神酒を給うことに神戸の源流をみる―

はじめに／一、大同元年牒にみえる神戸の分布とその特徴／二、祈年祭と律令制神戸／三、相嘗祭と律令制神戸新羅客人朝の神酒と相嘗祭祀―律令制神戸の源流―／おわりに

第五章 畿外神戸と神戸の変質

はじめに／一、相嘗祭祀の畿外神戸の特徴／二、天平神護期を中心とした畿外神戸の変質／おわりに

第三部 伊勢神宮論

第一章 伊勢神宮の神戸の成立

はじめに／一、神戸数の変遷と固定化／二、伊勢神宮の神戸の起源伝承／三、持統天皇に

よる伊勢行幸と神戸国―神衣祭と参河国の関係―／四、持統太上天皇の参河行幸と伊勢神宮／おわりに

第二章 伊勢神宮における神郡司の祭祀的役割について―神田宮種と御調荷前の淵源を探る―

はじめに／一、伊勢神郡の成立と神郡司の任用／二、祭祀の中の神郡司／三、神郡司による神田経営／四、御調荷前供奉行事にみえる神郡司／五、延暦十年御調糸窃盗事件に関わる神郡司の姿／おわりに

第三章 延暦儀式帳からみた伊勢神宮の神郡と神戸―神宮祭祀の重層性―

はじめに／一、儀式帳にみえる御贄奉献／二、御調荷前奉献と神職集団／三、拔穂稲と懸税の奉安の違い／四、伊勢神郡・神戸の役割とその歴史／五、伊勢神郡の内実／おわりに

第四章 住吉大社論

第一章 住吉大社神代記の編纂と遣唐使

一、住吉大社神代記の書写年代をめぐる議論／二、住吉大社神代記の巻末からみえる編纂過程とその動機／三、神代記撰進前後の日本をめぐる国際情勢―神亀四年（天平六年）／四、天平三年における氣比大神への神戸増封の史的背景／五、住吉大社神代記にみえる遣唐使の痕跡／六、津守氏の外交的役割／おわりに

第二章 津守氏から見た古代の住吉信仰について

はじめに／一、津守氏の台頭時期／二、船木氏と津守氏の関係／三、忍海氏と住吉信仰／おわりに

付 論

一、カモ神戸の成立とその史的背景

はじめに／一、葛木鴨の神戸（二）―出雲における賀茂神戸の史的背景―／二、葛木鴨の神戸（二）―土佐・伊予神戸の史的特質―／三、山城鴨の鎮座伝承と山城・丹波神戸の成立／おわりに

二、住吉大社神代記語句索引

まず本論文の概要を述べる。

本論は四部と付論で構成され、そのうち、古代神社の経済基盤を論じた神郡論・神戸論、個別神社の経済基盤に加え信仰の形成について論じた伊勢神宮論・住吉大社論（および付論の賀茂社）のふたつに大別することができる。

神郡論では、まず神郡が設置された意義を祭祀の面から検討し、八つの神郡（①伊勢国度会郡・②同多気郡、③安房国安房郡、④下総国香取郡、⑤常陸国鹿島郡、⑥出雲国意宇郡、⑦紀伊国名草郡、⑧筑前国宗像郡）について、神郡の祭神について考察する。その方法は青木紀元氏による降臨伝承の分析を再整理し、記紀や風土記などを用いながら祭神が登場するありかたを注視したものである。祭祀を行う主体となる倭王権と現地で実際に祭祀を行う集団の二重構造を意識しながら、八神郡の神社すべてを個別に検討し、すくなくとも神郡が設置された孝徳朝以前には記紀の材料となる旧辞が編纂され、そこに八神郡の祭神についての起源伝承が記載されていた可能性を指摘している。各地での神郡設置では畿内（中央）と畿外（地方）で祭祀伝承・起源神話が共有されていたことを強調し、七世紀の段階で「神郡」という新しい大和朝廷の軍事的且つ祭祀・思想拠点を設けていった」（六〇頁）とみる執筆者の主張は、おおむね賛同できる。また香取郡の事例を法隆寺文書や墨書土器といった一次資料から確認する研究方法でもわかるように、近年の文献史学・考古学での議論を十分に踏まえており、そのうえで従来は神社経済史と祭祀論・神社論と区別されてきたものを、八神郡

すべてにわたって検証した功績は大きい。

続く神戸論では、戸数などを根拠に神戸を「経済的側面に限定するのは明らかに間違い」とし、時代の変遷のなかで神戸の性格を押さえてゆく。そして神戸は祭祀集団（祝部）の出身母体であり、このような集団人身把握と律令制の領域編成というふたつの論点を引き出し、祭料を調進する神戸の性格を改めて定義している。第二章以降の具体的な検討では、神税の租は初穂であるとの重要な提起を行ない、大倭国正税帳を用いた奈良時代の神税運用について考察をしてゆく。また神戸の租庸調には在地で消費されるもの、交易によって財源となるものの二種類があったと整理した点も注目すべき見解である。

さらに『新抄格勅符抄』の記述でみられる天平神護期の神戸寄進は、称徳朝の政策として理解しており（二一九頁）、道鏡の影響や仏教政治などと一面的にとらえられがちな奈良時代後半の神祇政策についても新見を披露したものであるといえるだろう。総じて、神戸は経済基盤のみでは理解できない背景をもつことを、史料から論証することに成功している。

このような神戸の起源については、全国的に「評」が設置された孝徳朝であったと位置づけ、大化改新詔による行政制度の導入という変化を経ながらも、それ以前から存在した奉斎集団（部民）のまとまりを維持して神戸に移行しており、大夫層にあてがわれた食封とは根本的に性格が異なることを結論とする。

そして畿内で神戸を有する神社の特質として「祭儀の古態」がうかがえるとした相嘗祭の意義を掘り下げ、在地の祭祀を在地に委ねるとみる近年の通説（岡田莊司・藤森馨氏）を基礎に、酒米の供出から相嘗祭の在地性を読み解いてゆく。古い祭祀（神戸を持つ畿内の神社）をもとに新しい祭祀（相嘗祭）が整えられたとみる歴史的視点であり、文献史学による祭祀制度の研究として至大な結論といえる。これに対して畿外の神戸については倭王権の意向にもとづいて設定されたと解釈している。

ここまででも質・量ともに重厚な本論文であるが、神郡・神戸での研究をさらに具体的な神社で展開したのが伊勢神宮論・住吉大社論になる。

伊勢神宮論の二篇では、諸社のなかでは特に膨大な神戸を擁した伊勢神宮について、神戸・神田の由来を延暦儀式帳にみえる倭姫命の巡幸・現地勢力（国造・県造）の奉献の伝承から析出した。巡幸の伝承が時代を経て、テキストを経て発展していることは確かであるけれども、尾張・参河・遠江は後次的に神戸が配次された時点で、巡幸伝承に組み込まれていくことを鮮やかに論証している。

続いて神郡の郡司がいかに祭祀に関与したかを論じ、祭祀を支えた現地勢力・歴史性を具体的に検討している。執筆者の主張は神郡の郡司が祭料を弁備することの強調であり、神田からの抜穂（大神への奉献）と神郡・神戸からの懸税（初穂儀礼）を区別するなど、祭祀の本質に迫る見解も優れている。

また神宮の神衣祭で参河国から奉献された「赤引神調糸」について、九世紀以前には参河から調進されていたものが、『弘仁式』『延喜式』の段階で多気・度会など神郡内から調進するように変化したとの新見を提示する。これは神祇令集解の諸説を誤りとみる先行研究（明法家が神衣祭を大嘗祭と誤解しているとみてきた熊田亮介・西宮秀紀・藤森馨氏らの解釈）に対する批判であり、神郡・神戸の性格を歴史的に展望する本論文ならではの提示である。

これに対して住吉大社論の二篇は神郡・神戸論とは方法・対象を異にし、従来から成立年代に議論のある「住吉大社神代記」の天平三年奥付の意味を検討して、遣唐使に任じられた津守氏の実績から、天平四年の遣唐使任命をにらんで撰述されたとする第一章、津守氏と住吉社・住吉津との関係を六世紀に引き下げた古市晃説への批判から、葛城山地の水利伝承をもとに津守氏の活動を四世紀にさかのぼると再評価した第二章から構成されている。いずれも執筆者が奉職される住吉大社の信仰に焦点を絞った歴史学からの研究である。特に第二章では、津守氏の四々五世紀代での活躍と南河内での水利慣行を結び付けた考証で、『日本書紀』仁徳天皇十四年は歳にみえる「感玖大溝」をめぐってフィールドワークを踏まえた新見解を提示しており、古市晃説への批判として有効であるのみならず、五世紀での畿内の動向に論及した好論である。

以上、概要を踏まえて全体への評価を示せば、本論文は古代の神社制度を理解するうえで不可欠な神郡・神戸の問題を深く掘り下げ、近年の研究も含めた膨大な研究史を正面から受け止めた本格的な研究である。神郡・神戸は経済的な側面だけではなく、大化前代にさかのぼって地域の有力神社が現地の祭祀集団によって維持・奉斎されてきたことを丹念に論証しており、堅実な研究方法によって導かれた結論は信頼性が高い。

戦後の祭祀研究、神道研究のなかには、神祇統制（支配イデオロギー、服属儀礼）の面を強調する研究動向が主流であったが、それに対して、在地の伝承・奉斎集団に目をくばり、八神郡の諸神社を同じ地平で論じた本論文の意義はきわめて大きい。そしてそのことが伊勢神宮、住吉大社といった古代以来の神社の信仰の基盤にあることを具体的に明らかにした点は卓れた達成であり、古代の神社制度研究の分野で将来にわたって参照されるべき業績といえる。

本論文を構成する十五章のうち、既発表の論文はわずかに二章のみであって、残りはすべて今回の学位請求にあたって新規に執筆されている。それもあつてか、註型式の不統一やわずかながら誤記もみられた。しかしながら四〇〇字詰原稿用紙換算で約千五百枚に及ぶ、質量ともに重厚な論文のなかでは、本質的な欠陥ではない。むしろ本論文からは、神明奉仕の多忙な日々にあつて学問研鑽を怠らず、先行研究と篤実に向き合い、近年の研究動向を意欲的にとらえつつ、史料に沈潜して祭祀の特質を探る川畑勝久氏の学問姿勢が伝わってくる。公開審査で行われた口頭試問では、改めて参照資料を用意して論旨が正確に伝わるように努め、終始真摯に応答されていたのも印象深い。同氏は本学の文学研究科を修了した研究者・神道人として、本論文の成果をもとにさらなる研学が期待できるであろう。

以上、ここに審査にあたった教員一同は、一致して川畑勝久氏の学位請求論文「古代日本の祭祀伝承とその基盤」が博士（文学）の学位にふさわしいことを報告する。

令和二年六月十日

主査 遠藤慶太

副査 加茂正典

副査 荻木美行

